かみのやま歴史・文化財さんぽ

第７号（平成３０年３月）

権現堂のしだれ桜

正中二年板碑

あゆむ「この道路は前に通ったよね。」

ミドリ「そう、家族で蔵王のスキー場にいくとき上って行ったわ。」

ふみお「確か、途中に大きな桜の木があったな。」

みどり「あれだわ。枝が垂れ下がって大きい！」

文じい「ここは権現堂。そしてこれが有名なしだれ桜じゃ。またの名をふりそで桜。」

ミドリ「あら、板碑を見に来たんじゃなかったの？」

文じい「うむ、そうなんじゃが、ここに来ればまずこの桜じゃろう。地区や保存会の方々が大事に見守ってくださっている。昨年も、支える柱を新しくしてくれた。」

ふみお「ところでじいの言った板碑はどれ？たくさんあるよ。」

あゆむ「このでかいのじゃない？」

ふみお「“巳待供養塔”と彫ってある。種子は…。」

文じい「キリーク、阿弥陀如来じゃ。延享五年とあるから、江戸時代の 1748 年で、打ちこわしや百姓一揆が起こった翌年じゃな。」

ミドリ「右のは、“南無阿弥陀佛”と彫ってあるわ。これじゃないでしょう？」

あゆむ「あ、奥に説明板が立っている。あれだ！」

ミドリ「なるほど、これなのね。種子がなんだかうっすらと見える感じがするわ。」

文じい「ほほう、少しずつ見えるようになってきたようだの。種子は“バク”で“釈迦”じゃ。」

あゆむ「お釈迦様のこと？」

文じい「そう、釈迦如来じゃ。そして、次のように彫ってあるというんじゃ。」

ふみお「あれ、正中二年（1325）といえば、湯町の板碑と同じだね。それに、内容も似ている。ただ、十三年というのはなんだろう？」

文じい「よいところに気づいたな。これは、亡くなった父親の十三年忌ということらしい。つまり、亡くなってから 13 年目を迎えて霊を弔うために建てた卒塔婆ということになる。」

ミドリ「なるほど。それにしてもよく字がわかるわね。何か方法があるの？」

ふみお「“拓本“ということを聞いたことがある。」

文じい「おおよく知っておるの。紙を水張りし、綿で押さえ、墨を付けたタンポでたたいて型をとる方法じゃ。その方法でとった前回の第 6 号“応長元年大日板碑”の拓本の画像は、次のようになっておる。片桐繁雄先生がとられた拓本をお借りした。」

あゆむ「わお、こんなにくっきり！」

ミドリ「あ、欠けてわからないところがはっきりしいるわ。ここが後で記録によってわかったということね。」

ふみお「特に“有道坊”というリーダーの名前がわかったのはよかったよね。」

文じい「その通りじゃ。それで、図にすれば次のようになる。」

ふみお「なるほど。調べを深めてやっといろんなことがわかるんだね。」

文じい「そうじゃのう。ふみおもがんばれ！」

ふみお「うん！ところで“巳待”というのを、電子辞書で調べると、己巳の日の巳の刻（だいたい午前10 時ころ）を待って寄合して弁財天を祈る。そうすると幸運に恵まれると出ている。」

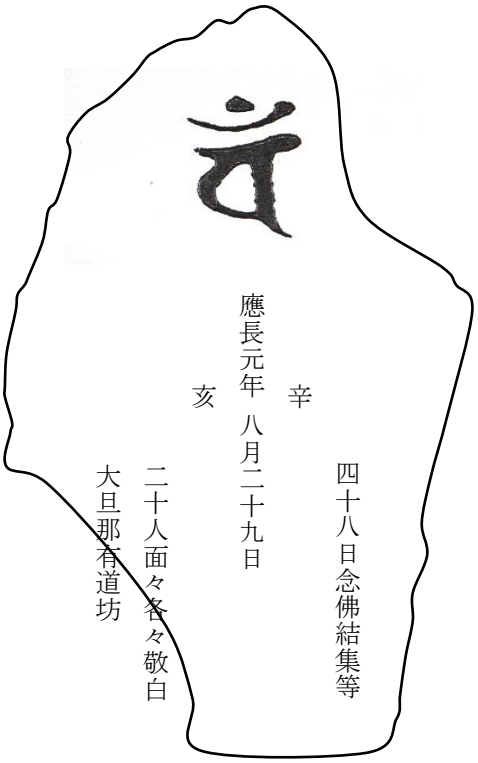
ミドリ「弁財天というのは？」

ふみお「災厄を除き、戦勝を得させる女神だって。」

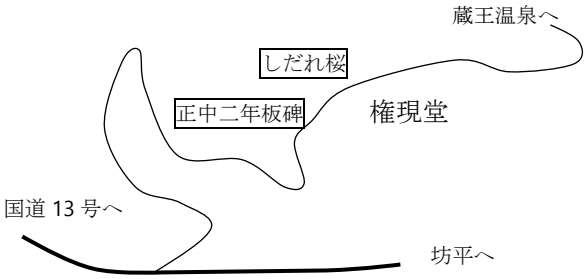
文じい「七福神のひとつで、福徳や財宝を与える美しい女神とも言われている。」

あゆむ「へえ、会ってみたいな。」

文じい「権現堂は、ここに説明板があるが、古くから蔵王権現への修行や参拝のためにたくさんの人が行き来し休息したところじゃ。釈迦堂が建てられて釈迦如来が安置されておった。今は、公民館の中に移されておる。春、500 年も生きてきたこの桜が見事に咲く頃にまた調べに来てみるとしよう。」



権現堂の「しだれ桜」と「正中二年板碑」



発行：　上山市教育委員会生涯学習課文化財・文化芸術係　　電話　023-672-1111（内線 314）